

4月7日から1週間、
宮城県の医療機関へ支援に行っていました。

1日目:多賀城中学校の避難所訪問

私は医療チームとして参加しました。午前中は薬局ブースで服薬指導を行いました。薬は数や種類が限定されており処方日数も基本的に3日のみ。その場の薬で対応できない場合は坂総合病院への受診を勧めました。親と同じぐらいの年齢の方にも服薬指導をしましたが、その後40分ほど隣人が亡くなりつらかったことや、早く家に帰りたいといった内容を語られました。励ましの言葉も見つからず、何もしてあげられないことが辛かったです。医療チーム以外にも、心理士の方の提案で、「子供の遊びチーム」が結成されました。「遊びの場」を市から借りて、避難所の子供達を精一杯遊ばせるというものです。元気に遊んでいる姿をみて、親も安心したそうです。津波によって傷つき、長期に閉鎖空間で生活するストレスを抱える被災者の心。そのケアが重要になると思いました。

2日目:多賀城中学校から多賀城体育館へ避難者の移動

医療チームもみんな運搬のお手伝いになりました。また、ケアマネジャーの提案で、坂総合病院の車イスを用意して、希望者を移動先の体育館まで乗せて行きました。引越後直後の混乱も考えられましたが、ある程度現場が落ち着いたところで診療ブースを作り、医療活動を行いました。今後は引越し後の疲労や砂埃などから来る新たな疾病への対応、インフルエンザ、ノロウイルスなどの蔓延予防など、薬剤師もニーズに合わせて持つべく薬剤を選択する必要があると思います。

3日目:多賀城市のツバサ薬局で調剤業務

1日の処方箋枚数が500枚を超え、ただでさえ忙しいのですが、4/9(土)までは43日分以上薬が処方された時は30日分のみお渡しし、他は欠品扱いにしていたため、その欠品日数分の調剤鑑査も加わりました。また、急に地震がきて薬局がぐらぐら揺れることがありました。すぐに蛍光灯の下から離れて安全を確保しましたが、ガラスにヒビが入っている箇所もあり、身の危険を感じました。今後は再度大きな地震や停電が起きた場合の対策が課題となるかと思えます。今回の支援では沢山の仲間と出会い、様々な職種の方と一緒に仕事をすることが出来ました。大変貴重な経験になりました。ご心配をおかけしましたが、無事帰ってきました。応援ありがとうございました。

加来 航



東日本震災の救援募金や物品提供にご協力いただきありがとうございます。
熊本民医連としてまとめ、全日本民医連を通じて被災地に届けております。

株式会社 健康共同ファルマ 入社式
よろしくおねがいします!!

左から
事務新入職員の迫田佐枝子(本社)、
浦田彩実(ひまわり薬局)



新入職員紹介

神崎 睦子 (事務)

1歳の長女と夫の3人暮らし
趣味はドライブです
よろしくおねがいします!



福祉用具貸与事業所ひまわり 私たちは、利用者様の「介護幸せ配達人です!」

福祉用具貸与事業所の仕事は、自宅で介護が必要になった方の住環境と一緒に考えることです。お客様にとって身近な事業所になれるよう、日々努力しています。2011年もよろしくおねがいいたします。

福祉用具販売、レンタル、住宅改修工事等何でもご相談下さい。

(株)健康共同ファルマ 福祉用具貸与事業所 ひまわり
熊本市神水1-21-16 電話(096-387-5211) FAX(096-387-5323)
Eメール:okamoto@kk-pharma.JP 岡本 修

携帯で簡単登録!

さくら薬局情報



住所や電話番号の情報が載っているQRコードです。

さくら薬局だより

■発行所/さくら薬局 〒867-0045 水俣市桜井町2-2-19
■TEL0966(63)7100 FAX0966(63)3960
■通話料無料フリーダイヤル 0120-63-9383
■発行責任者/甲斐 康幸
■HPアドレス/http://www.kk-pharma.jp/

2011
No.48

初夏号



二つの震災から学ぶこと

東日本大震災は、3月11日の太平洋三陸沖を震源として発生し、津波と原発事故も相まって、甚大な被害をもたらしています。亡くなられた方々のご冥福を祈るとともに、被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げます。



取締役・さくら薬局
甲斐 康幸

各薬局をご利用いただいている皆様から寄せられました義捐金・物品は熊本民医連としてまとめた後、全日本民医連を通じて被災地に送らせていただきました。ありがとうございました。

私たち健康共同ファルマからは求められた薬剤のリストから降圧剤を早速送り、その後、宮城に二人の薬剤師が支援に出向きました。

さて、私達薬局の加盟する全日本民医連は過去に(1995年1月17日)阪神・淡路大震災を経験し、その支援の経験からいくつかの教訓を得ました。それはまず被害にあった現地の病院・薬局が地域のネットワークを生かし救命など当面の支援を全力で行なうこと。そして、その「被害の実態」とともに、その時どきに求められる「人」「物」の情報を発信し続けることです。全国からかけつけた仲間の支援スタッフを統括し、他の団体と調整する仕組みも必要です。支援物資も具体的なリストを作成し、以前のように支援物資の整理(違う銘柄の薬が重なるなど)に手間を取られことも防ぎます。

支援の中身も当初の救急医療から次第に慢性疾患管理、悪化防止、リハビリに移り、後には心のケアの必要性が強調されました。支援に行かれた方々の二次被災のケアも必要です。

今回は原発の事故も重なりさらに健康の回復ともに地域の復興が大きな課題として残っています。「地震・津波から原発を守るのか」との以前から国会等での指摘が生かされなかったのが悔やまれます。そして、それは私たちの住む町でもこれから考えていかないといけない課題でもあります。まだまだ支援は必要と思われる。今後ともよろしくおねがいします。

